
オレンジ色の夕日

森かえで

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

オレンジ色の夕日

【Nコード】

N8825A

【作者名】

森かえで

【あらすじ】

猫のおばさんがいなくなつた…。でも、戻つて来ると信じてる。精神と身体の間揺れていたおばさん。陽炎に浮かんだ夏の夢。

(前書き)

タイトルはフジファブリック『茜色の夕日』からもらいましたが、
小説内容とは全く関係ありません。あしからず…

オレンジ色の夕日

猫のおばさんがいなくなった。昨日の昼、買い物行ってくるわ、とアパートの管理人さんに言い残し出かけたきり、行方がわからなくなつたのだ。

アパートの前には、パトカーが一台だけぼつんと止まっていた。ほとんど、いつもどおりの静かな風景。おばさんの失踪を知っているのもアパートと隣りの団地の住民だけらしい。

「おばちゃんもかわいそうだね」

姉ちゃんがそつめんをつるつるやりながらつぶやいた。「さつき来てただけだね、親戚っぽい人が。けど全然興味ないっていうか、むしろ迷惑そうな顔してたよ」

「ちゃんとアパートまで来てくれただけマシじゃないかしら」
母さんが顔をしかめて言った。

おばさんはアパートの裏庭で野良猫にえさをやるものだから、近所の人、特に主婦の面々からの鼻つまみ者だ。常に体をまとっている猫の匂い。白髪交じりの髪は頭の上でお団子にして、首にはいつも同じスカーフを巻いていた。柔らかそうな素材で、色あせたオレンジ色。アパートと団地の間を抜ける古い小道の、通学用の歩道と同じ色だった。

でも、いつか、話したとき（ほんの2・3回だけけど）声が小さい女の子みただってことに気付いた。そして笑った顔も、じゃれる猫を見つめる瞳も。

たぶん、僕はおばさんの安否を心配する数少ない人間の一人だと思つ。

昼を過ぎるとぐうっと気温があがった。

姉ちゃんと扇風機の前に座っていたら、二人くっつきあっています。まず暑苦しいことになってしまった。

「とおる。ねえ、どいて、よっ」
熱の停滞域に蹴り出される。豊がしみしみ湿って、足の裏に張り付いている。

洗面所で顔を洗うとうだる暑さが少し和らいだ。小さな窓の外からはアパートが見える。おばさんの親戚の人が門から出ていくところだった。

ゆらゆらむらむら、アパートが、陽炎に躍る。親戚に付き添う警官も、パトカーも一緒にゆらゆらする。

ゆらゆら、ゆらゆら。すべて、視界はかき回されて…

目の前に猫のおばさんがいた。

「あたし、にゃおみよ！！」

「え」

しわとしみだらけの顔には不気味な、幼い女の子のセリフ。

「私ね、ようやく猫の国に行くことができたの！！！」

ぴろりいいん 効果音で突然表れる背景。ピンクとブルーとエメラルドグリーンがオーロラみたいに入り交じる。そして、シンデレラでも住んでいそうな、白くて大きい城。

だいたい色のスカーフがおばさんをぐるぐるっと包んで、オレンジ色のドレスに様変わりした。頭には金色のティアラ。

「とおるくん、ようこそ！！！」

ぴろりいいん

「おばさんどうしたの」

「にゃおみだよ」

「にゃおみさん」

こうして話してる間に、おばさんの中で何かが変化しているようだった。ときおり、音が聞こえる。ぱきぱき、乾いた小枝を折るような。

「にゃおみは、間違っって人間に生まれてきたの！！！」

「ぱきん!!」

「どういこと」

「本当は猫なの!!」

「ぱき、ぱきん!!」

おばさんの体が伸びた。曲がっていた腰がぴんとまっすぐになったのだ。ドレスはだぶだぶのものからタイトなものへ。顔のしわも減っていた。

「ここがあたしのふるさとなの!!」

「そうなの」

「うん」

ぴろりいいん 笑顔に効果音。

おばさんは母さんと同じくらい年齢になっていた。

「じゃあ、これから、ここにいるの」

「そっだよ」

答えたのは僕と同じ背丈の女の子。髪がさらさらして、白くぴちぴちした肌にティアラが良く似合う。

「とおるくん、この国においでよ!!」

「えっ」

「猫っ毛だし、猫舌でしょ」

「うん」

「つり目がきりりとしてる、きれいな男の子になれるよ!!」

女の子がにこっと笑うと、また、ぱきぱきと音がした。背丈がまた縮む。

答えられずにいたら、女の子は寂しげな顔でほほ笑んだ。こっちに大きくうなづいて見せる。

「暑くて、陽炎ができてたでしょ!!」

「ぱきん!!」

「ゆらゆら、ゆれてたでしょ!!」

「ぱきん!!」

「あたしは、ずっと、ゆれっぱなしだったの、猫と人の真ん中で」

もち肌の赤んぼうがもぐもぐと口を動かしてる。

「わかんなかったんだ、どっちか」

ぱきぱき…

「でも、わかったよ」

ぱきつ。朱色の服を着た、胎児。

「だって、ここに來れたんだもん」

ぴろりいいん 胎児すらまだ縮んでいく。

そして、目の前には地面だけが残った。声はだんだん小さくなつていく。

「おばさん、もう、会えないんだね」

「にゃおみだよ」

「にゃおみさん」

と、一匹の虎猫が城から歩いてきた。城の者らしく、歩き方に品がある…。ように、思えた。口には透明な小びんをくわえている。

「大丈夫だよ。あたしは、裏庭のみんなが大好きなの!!」

猫が小びんを地面に横たえる。小びんは音をたてずにはかっ割れた。中の液体がながれだして、地面に大きな染みをつくる。

「もちろん」

ぷちん。

「とおるくんも、大好きだよ」

ぷち、ぷちぷち。

何の音？ 何かが小さい膜からはじけだすような。

… 発、芽？

そう感じた瞬間に、城からどうと轟音が聞こえた。と、何千という猫が飛び出してきた。扉といわず、窓という窓からも駆け出してこつちに向かって来る。猫の大群はあつというまに

『発芽』場所のまわりに集まってきた。こちらの側にもぞくぞくとやってきて、その一部に踏み倒された。起きあがるうにも、猫たちは体の上にたくさん積み重なっているのだらう、なかなか起きあがれない。猫たちの間から、地面に横たわる小さい朱色の丸まりが

『生えている』のが見えた。

尖った爪が背中に刺さる。やがて、頭がぼんやりとしてきた。思考がゆらゆらと陽炎に飲み込まれてゆく。視界の中の猫たちが、輪郭を失って溶け合う、混ざり合う。ゆらゆら、ゆら…

またね、と、かすかに聞こえた声は、誰のものだったろう…

「おかーさあん、やあっと起きたあ」

見ると、姉ちゃんが背中に乗っかっていた。

ああ暑い、自分からのつかたたくせにそんなことをぶつくさつぶやいている。

畳の上に大きな汗染みができていた。夕飯の、カレーの匂い。長いこと眠っていたんだろう。

おばさんはまだ見つかっていないらしい。

夢の内容を反復してから、窓の外を見る。暮れゆく空の色、オレンジ色。陽炎はもう見えない。

「あの人、帰って来るのかしらねえ」

「来るさ」

「へええ、自信あるわけ」

「まあね」

にやあん、と、凜とした鳴き声が聞こえた。オレンジ色に染まった猫が、新しい仲間を待っているのだ。

(後書き)

川上弘美のような雰囲気を感じたかったです、いかがだったでしょうか… 感想・評価頂ければ嬉しいです

オレンジ色の夕日

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8825a/>

オレンジ色の夕日

2009年6月16日15時47分発行